ケアする居場所 外国につながる親と子をまとめて支える

原 めぐみ
HARA Megumi

はじめに

「ヤングケアラー」という言葉が五年ほど前から一般的に使われるようになった。政府は、こども家庭庁の柱の一つに「ヤングケアラー支援」を掲げている。しかし、ヤングケアラーという言葉が一人歩きし、ヤングケアラーとして想定される子どものイメージだけが先行しているのが現状だ。統計的な把握が難しく、実態がなかなか明らかにならない。その「見えにくさ」、「捉えにくさ」こそがヤングケアラーの特徴であり、見えない子ども・若者たちへの支援は容易なことではない。

筆者は大阪市中央区で活動する「Minamiこども教室」という団体に携わっている。大阪市は、政令指定都市の中で外国籍住民の割合が最も高い。日本国籍も含め、外国につながる子どもの数は年々増加傾向にある。Minamiこども教室は、二〇一三年から外国につながる子どもたちを対象にした学習支援をしている。子どもたちは、学習面での課題に加えて、社会経済的な問題を背負わされている。もともと不安定就労を続けてきた外国人家庭の家計は、コロナ禍による不況でさらに逼迫している。親の「しんどさ」の皺寄せが子どもに向かっているのではないか。日々の活動の中でそんな危機感を抱いている。

本稿は、ヤングケアラーになる移民の子どもたちとその家族の実態を「居場所」というキーワードを軸に記述し、問題解決のための支援活動の息吹を紹介することが目的である。

1　ヤングケアラーになる移民の子どもたち

ヤングケアラー研究の第一人者であるイギリスの研究者、ソール・ベッカーらは、ヤングケアラーを「家族のメンバーのケアや援助、サポートを行っている十八歳未満の子ども」と定義している（Becker, Dearden and Aldridge, 2000）。ケアの内容は、身辺ケア、きょうだいの世話、家の中の家事や家族への情緒面のサポートなどが含まれる。ヤングケアラーが担うケアは、幅広く繊細で、複雑である。大阪でヤングケアラー研究を行ってきた村上靖彦は、ヤングケアラーがしているケアについて、身体的ケアに留まら

ず、親を「慮ること」や、「気遣う（ケア）ということ」、親の「生きづらさ」を理解することだという（村上、二〇二二）。

イギリスやオーストラリアのヤングケアラー調査では、移民の子どもたちの中にヤングケアラーがいることが自明である（Dearden & Becker, 2004）。難民・移民のヤングケアラーにおいては男子の割合が比較的高いことや、精神疾患をもつ家族の面倒は家庭内でみるべきであるという文化的スティグマがあるという（Centre for Multicultural Youth, and Ethnic Communities, Council of Victoria, 2011）。日本における質問紙調査でも、ヤングケアラーの中には、通訳などの特殊なケアを行っている外国人の子どもが少なからずいることが確認できる（北山・石倉、二〇一五、濱島・宮川、二〇一八）。

次章では、事例を検討していきたい。なお、筆者がこれまで出会った複数のケースを組み合わせており、特定の人物の事例ではないことを断っておく。

2　ヤングケアラーがケアする居場所

ケン（十八歳、男性）は、フィリピン人の母親と歳の離れた妹と三人で暮らしている。ケンの父親が日本人だったため、ケンは日本国籍だが、母と妹はフィリピン国籍だ。母親は精神的に不安定になることがあり、仕事も転々としている。ケンが中学生の頃に妹が生まれた。当時、母親と、妹の父親との口論が絶えず、ケンはいつも巻き込まれ、夜中まで話に付き合わされた。生活リズムの整わない妹の面倒を夜遅くまでみるのも日課になっていた。そのため、中学校に遅刻することも増え、「友達に迷惑をかけるから」と部活もやめた。その後、不仲が原因で妹の父親は家を出ていった。妹の面倒をみるのが大変になった母親は、いっそうケンに育児を任せるようになった。現在、妹は小学生になったが、妹は母親よりもケンのいうことを聞き、ケンと一緒でないと眠りにつけないという。ケンは高校を卒業後、地元企業に就職した。母親のことは理解できないことが多いが、面と向かってぶつかると家庭崩壊につながるので、穏便にすませているという。経済的にも精神的にも家族を支えながら、彼は母親と妹にとっての安全な居場所をつくっている。

タイにルーツをもつアイリ（十八歳、女性）は、日本とタイを行き来しながら生活をしてきた。幼稚園までは日本で過ごし、小学校時代はタイの母親の実家で過ごした。母親は、アイリの父親と別れたあと、シングルマザーとして暮らしていたが、経済的にも物理的にもアイリを養育することが難しかった。中学生の時、アイリは突然日本に呼び寄せられることになる。アイリは日本語をすっかり忘れていたし、タイにたくさんの友達を置いて来日することがいやだった。日本国籍をもつアイリにとっては手続き上、来日は難しくなかったので、素直に母の言いつけに従った。アイリが来日した時、アイリの姉は未婚で子どもを産んだばかりだった。母と姉は働いていて、姉の子どもの面倒をみるのは中学生のアイリの仕事になった。アイリは反抗することもなく、姪の面倒をみたが、内心は複雑だった。タイでは成績優秀だったが、日本では言葉の壁があり、授業についていけないまま、苦労して高校に進学した。その頃、アイリの母親はギャンブル依存症の状態になり、家でまともな会話をすることができなかった。高校卒業を機に、アイリはタイへ戻り、タイの大学に進学することを決意する。すべての準備を自力で行った。家族に振り回されず、自分の人生を取り戻したいと思っている。

ケンとアイリは、中学生の頃からきょうだいの育児をはじめとする家庭内のケア役割を担っていた。また、母親たちを気づかったり慮ったりしながら、感情面のサポートもしてきた。ケンは、言語面でも母をサポートし、妹の学校との連絡も彼がしており、「言語的・行政的なケア」を行っているといえる。アイリは、母親だけでなく、働く姉のことも気づかい、自分の感情に蓋をして、姪の面倒をみていた。二人とも

まだケアされるべき年齢の頃からケアする立場にあった。家族をつなぎとめているものは紛れもなく、かれらだった。かれらが家庭を家族のメンバーにとっての「居場所」にしていた。

このようにケンやアイリがヤングケアラーになっていたのは、母親たちの責任だろうか。そうではない。ひとり親であることとともに、女性であること、そして移民であるという社会的な立場が、彼女たちを幾重にも弱者化させている。特にタイやフィリピン出身の女性は、一九八〇年代からエンターテイナーとして来日し、中には性的搾取を受けてきた人もいる。また、来日する理由として、母国での貧困があり、彼女たちもまた、家族を養うために移住し、仕送りを続け、グローバルにケア役割を担ってきた。日本人と結婚し、定住してからも、夫との不平等な関係性から、DV被害にあいやすく、その結果シングルマザーになりがちだ。精神的、肉体的に傷を負った女性たちは、心が追い込まれる。親族のサポートがない中で、仕事と育児を両立することは容易ではない。社会に対して懐疑的になり、将来に悲観的になっている母親たちが、「この国で信頼できるのは子どもたちだけだ」、と頼りにするのも無理はない。

さらに、在留資格の更新のたびに「家族関係の査定」が行われる。たとえば、日本人と離別・死別した後、子どもを養育する目的で「定住者」の在留資格に切り替わるが、その更新のためには、自立して子どもを養育していることを証明し続けなければならない。たとえば外国人の母親が離婚後に親権をもたなければ、本人の在留資格の更新は難しくなる。外国人のシングルマザーにとっては、子どもを育てているということが、日本での在留理由であり存在意味となっている。

先述の村上は、ヤングケアラーは「家族をケアするだけでなく、付随して貧困や制度的な排除、差別といった社会構造のなかでのハンディキャップや理不尽を背負い込」んでいるがゆえに、「ケア役割から逃れることができな」くなってしまうと述べている。移民の子どもたちも入管法をはじめとする法や制度によって、ケア役割から逃れられなくなっている。子どもたちがケア役割を担うことによって、家族の唯一の居場所が維持される。

このような逃れることができないケア役割から子どもたちの心を解放するにはどのような支援が有効だろうか。次章では、Minamiこども教室の例を検討する。

3　ヤングケアラーをケアする居場所

ヤングケアラーを研究する濱島淑恵は、ヤングケアラー支援の方法を五点示している――①孤立の解消、②学習支援、③家事や食事の支援、④レスパイト（小休止）サービス、⑤伴走者の存在。Minamiこども教室の活動は、この五つにあてはまる。

Minamiこども教室は、二〇一三年に活動を開始したが、二〇一二年四月に起きた外国人母子無理心中事件が大きなきっかけになっている。大都会のど真ん中で孤立してしまった外国人母子は、周囲にSOSを出すことができず、居場所を失ってしまったのだった。ここで受けた深い悲しみと教訓を背に、活動開始当初から、外国人家庭を孤立させないことを一番の使命にしている。前述のケンは、小学校の先生から声をかけられ、Minamiこども教室に参加するようになった。アイリをMinami こども教室に誘ってくれたのは、同じタイルーツの友達だった。このように学校と連携し、当事者同士のよこのつながりも大切にしながら、孤立性の高い家庭の子どもに登録を呼び掛けている。

学習支援については、週に一度、学習教室を実施し、「学習」と「居場所」の両立を試みている。当初より外国につながる子どもたちの低学力が課題だったので、まずは「宿題を一緒にやろう」と声かけをしてきた。小中学校には日本語教室が設置されているが、それだけでは追い付かない。宿題をしたり、日本語教材を利用したりするだけでなく、対話的な学習方法をボラ

ンティアとともに学び、実行してきた。また、アイリたちが中学校三年生の頃、本格的に受験勉強の支援を始め、アイリもケンも無事に公立高校に入学することができた。

さらに初年度より料理教室を開き、孤食の子どもたちでも作れるレシピを紹介してきた。また、二〇一七年に同地域で子ども食堂を新設したいという有志との綿密な連携が始まった。コロナ禍の中では、さらにニーズが高まったため、支援として食品を配布する大規模なフードパントリーを共同開催した。今ではケンはフードパントリーで食料配布のボランティアをしてくれる頼もしい存在だ。

また、レスパイトにあたる課外活動も実施してきた。たとえば、夏の盆踊り大会や遠足は、活動開始当初からの恒例行事である。普段の生活圏が大阪市内の大都会なので、非日常を味わうために、体いっぱいで楽しめるスポーツイベントやキャンプを企画している。毎週の学習活動から足が遠ざかった中高生も、イベントには参加してくれるので、学校や家族の近況を聞く機会にもなっている。

孤立の解消と伴走者支援については、アセスメントが難しいが、できる限り長期にわたり関わることができるように、子どもや親に定期的に声掛けを行い、何か問題があるときには一緒に解決しようと寄り添ってきた。先述の村上は、「地域での子育て支援」をヤングケアラー支援の軸と考えており、ヤングケアラーになる前から学校や地域に複数の居場所があることが望ましいという。ただし、子どもだけを支援するのではなく、親と子を「まとめて支える」という視点が鍵となる。Minamiこども教室では、二〇二〇年度より、大阪市中央区の委託を受け、「保護者相談窓口」を開設し、毎年二百～三百件近い相談が寄せられる。

おわりに

Minamiこども教室の発足当初、ヤングケアラーという言葉はまだ用いられておらず、上記のような活動内容もヤングケアラーを念頭に置いて設計されたものではなかった。しかし、十年間、同地域で子どもたちに寄り添うことによって、結果的に「子どもの居場所活動」が徐々に定着しつつある。ヤングケアラー研究者の村上は、「子どもが自分の人生を選び取る主導権を持てるようなサポート」ができる「意思決定と行動を支える場」が重要だと述べている。家族をケアする子ども・若者たちが、基本的な子どもの権利を損なわれないよう、これからもMinamiこども教室は、子どもや親たちに寄り添う居場所であり続けたい。

【参考文献】
■Becker, S., Dearden, C. and Aldridge, J. 2000, "Young carers in the UK: research, policy and practice". *Research, Policy and Planning*, 8(2) : 13-22.
■Centre for Multicultural Youth, and Ethnic Communities' Council of Victoria. 2011, *Refugee and Migrant Young People with Caring Responsibilities: What do we know?* Carers Victoria Inc.
■Dearden, C. & Becker, S. 2004, *Young Carers in the UK: the 2004 report*, London: *Carers* UK.
■小ヶ谷千穂（二〇二二）「移動する子どもと「ケア」役割：「移動する家族」と「移動の中の子ども時代（Mobile Childhood）」の文脈から」『現代思想：特集ヤングケアラー』vol.50―14,11、青土社、七八－八五頁。
■北山沙和子・石倉健二（二〇一五）「ヤングケアラーについての実態調査：過激な家庭内役割を担う中学生」『兵庫教育大学学校教育学研究』二七巻二五－二九頁。
■濱島淑恵（二〇二二）『子ども介護者：ヤングケアラーの現実と社会の壁』KADOKAWA。
■濱島淑恵・宮川雅充（二〇一八）「高校におけるヤングケアラーの割合とケアの状況：大阪府下の公立高校の生徒を対象とした質問紙調査の結果より」『厚生の指標』65（2）、一般財団法人厚生労働統計協会、二二－二九頁。
■原めぐみ（二〇二二）「ヤングケアラーになる移民の子どもたち：大阪・ミナミのケーススタディ」『多民族社会における宗教と文化』二四巻、宮城学院女子大学、キリスト教文化研究所、四三－五二頁。
■村上靖彦（二〇二二）『「ヤングケアラー」とは誰か：家族を〝気づかう〟子どもたちの孤立』朝日新聞出版。

（はら　めぐみ・和歌山工業高等専門学校准教授・Minamiこども教室実行委員長）